



Title	古代チベット(吐蕃) 帝国の税役制度に関する考察 : 中央アジア出土木簡資料からわかること
Author(s)	尾崎, 昇
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 47-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91181
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古代チベット（吐蕃）帝国の税役制度に関する考察

—中央アジア出土木簡資料からわかること—

東洋史学 博士前期課程 1 年

尾崎 昇

はじめに

古代チベット（吐蕃）帝国は、7 世紀初めにその勢力をあらわし、チベット高原を拠点に中央アジアへ支配領域を拡大、異民族支配・広域支配を展開した。そして 9 世紀中葉にその命脈が尽きるまで、当時の大国、唐帝国（618-907）や突厥帝国（552-630; 682-744）、ウイグル帝国（744-840）等と比肩する一大勢力であり続けた。この古代チベット帝国の基礎を作ったのが、ソンツェン・ガムポ（在位: 6 世紀末-649）である。同時代の敦煌文書や後代の史料によれば、彼の治世に文字や法律、駅伝、土地制度等が定められたのだという。これらの諸制度が後に古代チベット帝国の繁栄に結びついたことは疑うべくもないが、その制度の詳細については未解明な点が多い。

本稿で扱う未詳の税制度「トゥル税」（thul ka ~ thul kha）もその内の 1 つである。先行研究では、詳細は不明としつつも、トゥル＝「皮」という語義から、トゥル税＝「皮税」と解釈されて来た。筆者はこの従来の見解に疑義を呈するとともに、新資料として中央アジア出土木簡を使用し、新たな見識の提出を試みる。

ところで、古代チベット史研究では、従来より同時代の紙文書・金石文等が一次資料として重宝された一方で、木簡資料は十分に活用されて来なかった。今回扱うトゥル税もその例外ではない。しかし、木簡資料が教えてくれることはあまりにも多い。およそ本稿が、古代チベット史研究における木簡資料の重要性を示す 1 事例となるだろう。

先行研究におけるトゥル税の見解

「トゥル税」（thul ka）を論じた先行研究としてまず参照すべきは、チベット史研究の泰斗、山口瑞鳳氏の研究である¹。彼はその論著で、以下の 2 資料を引用して考察している。

- ① [前略] …チベットの統治原理である大法令と、… [中略] …農地・牧地のトゥル税 (thul ka) とドル税 (dor ka) と、… [中略] …など、チベットの ^{ことわり}法 にまつわる良文の全てが、ツェンポたるティ・ソンツェンの御世で生じたのであった。あまねく人が御恩恵を思い出し感受したので、「思慮深いソンツェン（＝ソンツェン・

¹ 山口瑞鳳 1983: 『吐蕃王国成立史研究』東京: 岩波書店, p. 456, 485-486, 501 n. 87.

ガムポ)」の名を献上したのである。(『敦煌年代記』PT 1287, ll. 451-455)

- ② [前略] …賢者の事績として、農地ではドル税 (dor kha) を会計し、牧地ではトゥル税 (thul [kha]) を会計した。… [後略] (『賢者の喜宴』chap. Ja, fol. 9a, ll. 2-3)

資料①はチベット支配期に位置する敦煌文書からの引用であり、また資料②は 16 世紀に作成された仏教史からの一節である。資料①②より、トゥル税は牧地に課された税制度であることが読み取れる。さて、山口氏はこのトゥル税について、「確かなことは知られていない」としつつも、トゥル＝「皮」という原義にならって「皮税」と訳し、「登録した家畜の増減を調べる手段として『トゥル』が数えられた」と説明する。岩尾一史氏は、資料①を引用する中で、前述の山口説に基づき「皮税、皮の税」と訳す²。資料①の訳註を提出した王堯／陳踐氏・黄布凡／馬徳氏はそれぞれ「皮張数」「皮張」と訳し³、資料②の訳註を作成した黄顥／周潤年氏は「計算畜単位」と解釈する⁴。彼らの見解もまた山口説と軌を一にする。つまり、先行研究では「トゥル税」を、トゥルの語義が「皮」であること、そして牧地に課されることに依拠して「皮税」と訳している。そして、詳細は不明とするものの、家畜に関わる税と解釈するのである⁵。

果たしてこの先学の解釈は適切か。次節以後では、先行研究で扱われて来なかった中央アジア出土木簡にみえるトゥルの事例を考察する。その考察を通じて、トゥルとは何か、そしてトゥル税とはいかなる税制度か、という問題に回答を示すこととしたい。

トゥルとヤム

以下に、「トゥル」のみえる木簡資料の事例を提出する。

- ③ …?…ボンポ 7 人とボンの主人 2 人の 9 人へ均一な分量とする。…?…に達するまでの間に、1 日に 1 人あたり上位の酒?より椀に 10 ヤム (yams) ずつ与える。その合計は、酒 3 トゥル (thul)。(ミーラーン出土, ITN 330)
- ④ 僧団 21 人へ均一な分量とする。1 人あたり… [缺部] …合計は、酒 3 トゥル 半。…?…に酒… [缺部] …上級管理者 24 人へ均一な分量とする。1 人あたり… [缺部] …10 ヤム ずつ献上する。合計は、酒 8 トゥル… [缺部] (同上, ITN 279)
- ⑤ [缺部] …27[人]へ均一な分量とする。1 人あたり椀に 5 ヤム ずつ飲む?。中位の酒?[より]4 トゥル 半ずつ; 職人 102 人[に]攪拌酒?を椀に 3 ヤム ずつ与える。総合計[は]… [後略] (同上, ITN 282)

以上の 3 資料から、特定の人物に対する酒支給の文言と、「均一な分量で、1 人あたり～ヤムずつ、合計は～トゥル」という定型書式が確認できる。ここから、トゥルは酒

² e.g. 岩尾一史 2007: 「キャ制 (rkya) の研究序説」『東方学』113, p. 116.

³ 王堯／陳踐 1992: 『敦煌本吐蕃歴史文書 (増訂本)』北京: 民族出版社, p. 169; 黄布凡／馬徳 2000: 『敦煌藏文吐蕃史文献訳注』蘭州: 甘肅教育出版社, pp. 244, 246.

⁴ 黄顥／周潤年 2010: 巴臥・祖拉陳瓦『賢者喜宴』北京: 中央民族大学出版社, p. 11.

⁵ cf. 張怡蓀 (主編) 1985: 『藏漢大辞典』上・中・下, 北京: 民族出版社, p. 1178.

の容量を示す計量単位であり、さらにその下部単位として「ヤム」(yams)を備えていることが判明するのである。

トゥルが酒の計量単位であるならば、トゥルが実際に何を指していたかについても自ずと明らかになるだろう。つまり、トゥルとは単なる「皮」ではなく、何らかの目的のために加工された「獣皮」であり⁶、酒を容れるための「皮袋」であったと解釈できるのである。このことは、クチャ・ウイグル・モンゴル・漢文等の世俗文書において、「皮袋」を意味する語が酒の計量単位として使用されたこととパラレルな現象として理解されよう⁷。ここから、トゥルは元来酒を容れるための「皮袋」を意味し、転じて酒の計量単位になったと考えられる。

最後に、前述のトゥルとヤムの相関関係を検討する。資料③④⑤にみえるトゥル／ヤムの値を計算し整理すると、次のようになる。

・資料③: 9 (人) × 10 (ヤム) = 90 ヤム ⇒ 計 3 トウル ∴ ヤム : トウル = 30 : 1

・資料④: 24 (人) × 10 (ヤム) = 240 ヤム ⇒ 計 8 トウル ∴ ヤム : トウル = 30 : 1

・資料⑤: 27 (人) × 5 (ヤム) = 135 ヤム ⇒ 計 4.5 トウル ∴ ヤム : トウル = 30 : 1

ここから、ヤムとトゥルは一貫して 30:1 の比率であることが判明する。以上より、トゥルは「皮袋」を原義とする酒の計量単位であり、その下部単位として控えるヤムとは、30 ヤム = 1 トウルという換算比率の関係にあることが明らかになった。

トゥル／ヤムと大斗／升

本節では、トゥルとヤムの実情にさらに接近するべく、その実態値及び淵源を考察する。この問題を考えるにあたって、古代チベット帝国と同時代の唐帝国で運用された容量単位が参照に値する。以下、唐帝国の容量単位を概観しつつ⁸、計量単位トゥル／ヤムと比較することで、その実態値と淵源に迫ることとする。

唐帝国では、2つの容量制度が併用されたという。それは、中国南北朝期に由来する新制と古制の容量単位であり、唐では新制 = 大量が日常で用いられ、古制 = 小量が薬品の調合等、限られた場面でのみ使用された。また、大量と小量の換算比率は一般的に 1:3 であったという。唐代の容量単位の対応関係は次の通りである: 2 龠 = 1 合; 10 合 = 1 升; 10 升 = 1 斗; 3 斗 = 1 大斗; 10 斗 = 1 斛。

今、この容量単位のうち、下線を付した「大斗」と「升」の対応関係に注目されたい。両者の換算比率を計算すると、1 大斗 = 3 斗 = 30 升となり、升と大斗は 30:1 の対応関係であることがわかる。興味深いことに、この対応関係はトゥルとヤムのそれ—ヤム

⁶ Jäschke, H. A. 1881: *A Tibetan-English Dictionary: Compact Edition*. 京都: 臨川書店, p. 234; Das, S. Ch. 1902: *Tibetan-English Dictionary: Compact Edition*. 京都: 臨川書店, p. 583; Ibid. 山口 1983, p. 501 n. 87.

⁷ 慶昭蓉 2017: 『吐火羅語世俗文書与古代龜茲歴史』北京: 北京大学出版社, p. 153.

⁸ 丘光明 (編著) 1992: 『中国歴代度量衡考』北京: 科学出版社, pp. 258-259; 郭正忠 1993: 『三至十四世紀中国的権衡度量』北京: 中国社会科学出版社, pp. 334-343.

とトゥルの比率は 30 : 1 であり、1 トウル = 30 ヤムである一と軌を一にするのである。ここから興味深い仮説が浮上する。つまり、古代チベット帝国の三十進法の計量単位トゥルとヤムは、1 : 3 の大小量制が併用された唐帝国の容量単位の影響を受けて成立した、と考えられるのである。もしこの仮説が正しいならば、トゥルとヤムの実態値も自ずと明らかになる。唐代の 1 (小) 升は約 200 mL であるから、1 大斗 = 30×200 (mL) = 6 L となる。トゥルとヤムがそれぞれ大斗と升に対応するならば、1 トウル = 1 大斗 = 6 L、1 ヤム = 1 升 = 200 mL となる。この結果を、本稿で検討した事例である資料③④⑤に適用してみよう。資料には、1 人あたり最小で 3 ヤム、最大で 10 ヤム支給したとあるから、1 人あたり 600 mL ~ 2 L 飲酒したことになる。この飲酒量は非常に多量だと思われるかもしれない。しかし、例えば敦煌の酒破曆(酒の支出帳簿)では、1 日に 2 ~ 3 人で 1 斗 (= 約 6 L)、3 ~ 5 人で 1 角 (= 約 9 L) を消費した事例が知られているから⁹、特段驚くことではなく、むしろ妥当な数値であるといえよう。

以上、古代チベット帝国の計量単位トゥル／ヤムは唐帝国の容量単位である大斗／升到近似すること、またその実態値が 1 トウル = 6 L、1 ヤム = 200 mL であることを指摘した。この両者の一致は決して偶然なものではなく、おそらく古代チベット帝国の計量単位の淵源は唐帝国にある、と筆者は考えるのである。

むすびにかえて一トウルとトゥル税

本稿の考察結果は、次のようにまとめることができる。

- ・「トゥル」は、先行研究では、「皮」を意味し、「家畜の増減を調べる手段」であると考えられてきたが、中央アジア出土木簡資料の事例を検討することで、正しくは「皮袋」を意味し、「ヤム」という下部単位を備えた「酒の計量単位」であることがわかる。
- ・古代チベット帝国の液体計量単位は、唐帝国の大小量制と比較することで、1 トウル = 1 大斗 = 6 L、1 ヤム = 1 升 = 200 mL という対応関係を持つことが推定される。
- ・古代チベット帝国の計量単位は、唐帝国に由来すると考えられる。

さて、本項で述べたことが正しければ、先行研究で未詳とされてきた「トゥル税」についても新知見を提供できる。つまり、トゥル税とは、先学のいう「皮税」などではなく、計量単位トゥル／ヤムに立脚した税制度である、と言い改められるのである。そしてさらに踏み込むならば、前述のトゥル／ヤムが「酒」の計量単位であることから、トゥル税は「酒税」である、と言えるかもしれない。このことは、資料①②でトゥル税と並行してあらわれる「ドル税」が、土地計測単位である「ドル」(> Chin. 突)に基づく「土地税」であることを思い起こせば¹⁰、およそ無理のない解釈であろう。

⁹ 高啓安 (著); 高田時雄 (監訳); 山本孝子 (訳) 2013: 『敦煌の飲食文化』東京: 東方書店, pp. 143-144.

¹⁰ e.g. 姜伯勤 1984: 「突地考」『敦煌学輯刊』1, pp. 10-18; 池田温 1990: 「敦煌における土地税制度をめぐる」、唐代史研究会 (編) 『東アジア古文書の史的研究』東京: 刀水書房, pp. 46-70.